

作物名：りんご  
病害虫名：斑点落葉病（病原：*Alternaria mali*）



写真1 葉の病徴



写真2 果実の病徴

### 1 被害の特徴と診断のポイント

- 葉、果実及び新梢に発生する。
- 葉では、暗褐色～褐色の2～3mmの小さな斑点病斑を形成し、病勢が進展すると5～6mmの円形病斑や大型の不整形病斑（流れ病斑）となる。若い葉に発生しやすく、多発時には早期落葉する。
- 果実では、成果での感染が問題となり、果点を中心に1～5mm位の褐色～黒色円形病斑を形成する。幼果で感染した場合は、1mm程度の病斑を生ずるが、果実の肥大とともに病斑部ははげ落ち、収穫期まで残らない。葉での発生が多いほ場で多く見られる。
- 新梢には皮目を中心に褐色～赤褐色の円形病斑を形成する。

### 2 伝染源・伝染方法

- 本菌は被害落葉、枝病斑、芽の鱗片などで菌糸の形で越冬するが、伝染源としては被害落葉が主である。春に越冬菌糸から生じた分生子が第一次伝染源となる。4～5月頃から分生子の形成、飛散が始まり、葉上に病斑を形成する。果実には果点、新梢には皮目から感染する。
- 病斑上には分生子が形成され、葉、果実及び新梢に二次伝染を繰り返す。

### 3 発病しやすい条件

- 本菌は糸状菌の一種で、不完全菌類に属する。分生子のみを形成し、菌糸生育、分生子形成及び発芽適温は28℃である。
- 発病適温は、葉では20～30℃、果実では15～25℃である。落花直後から収穫期までの間に降雨が多いと発生しやすく、特に梅雨期～夏期の高温多雨で多発する。最低気温が20℃以上で3日以上連続降雨で急増する傾向がある。
- 宮城県では5月中旬頃から発病がみられ、その後、7月下旬にかけて増加する。

### 4 防除方法

- 密植園や枝が混み合っている樹では薬剤の散布ムラが生じやすく発生が多くなるので、徒長枝など不用な枝を整理し、薬剤のかかりを改善する。
- 被害葉、被害果実は、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- 開花期前後から9月上旬頃まで、黒星病や褐斑病と同時に定期的に薬剤防除を実施する。

### 5 その他

- 近年は、卓効のある薬剤の普及や防除の徹底により、宮城県での発生は少ない傾向が続いている。

## 6 出典

### (1) 参考文献

- 日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）
- ひと目でわかる果樹の病害虫第三巻（改訂版）（日本植物防疫協会）
- 農業総覧原色病害虫診断防除偏第5巻（農文協）

### (2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影

（令和5年9月改訂）